

日本音楽財団が次に貸すのは誰か

流浪の名器 「パガニーニ・セット」



望外の名器貸与はいつまで続くか(パガニーニ・セットを手にするクレモナQ、アムステルダム、1月)

の音楽ファンには嬉しいニュースだったが、いささか異なる視点でこの報に接した人々も少なからずいた。なにしろ東京Qが弾く楽器は、ヴァイオリンは一六八〇年作《ディセント》と二七二七年作《サラブリーエ》、ヴィオラは一七三二年作《バガニーニ》、チェロは一七三六年作《ラーデンプルク》。どれもが通称を与えられるほど素性明らかで、ストラディヴァリウスで、四挺揃いで「パガニーニ・セット」と呼ばれる極めて状態の良い名器だったのである。

一九九四年に日本音楽財団がセットを一千五百万ドルで購入、世界を代表する日本出身の名団体に無償貸与していったもので、その名器の使用者がいなくなったのだ。十挺ほどしか現存しないヴァイオラはとりわけ希少性が高く、博物館にお蔵入りとなっても不思議はないお宝である。実際、マドリッドのスペイン王宮に展示されるカルテット専用ストラディヴァリウス・セットは王宮内で年に数回、非公開の招待

演奏会で弾かれるだけの門外不出。ナポレオンが持ち出した以外、ローマ法王からのバチカン招待演奏も断ったという。米国会図書館にあるセットも、館内での公開演奏で用いられるのみである。

世界に六セットあるというストラディヴァリウスのカルテットのうち、普通の音楽好きがコンサートホールで耳にできるのは「パガニーニ・セット」だけだった。そんな特別な楽器の行方がどうなるか、臆測が乱れ飛び、東京の同財団に世界の音楽界の熱い視線が注がれた。ほどなく、ザルツブルク拠点で国際的に活動する重鎮ハーゲンQへの貸与が決定。二〇一三年暮れから再び現役楽器としてつがなく響き始めた。若手演奏家育成も視野に入れ、名器貸与を行う同財団の活動方針から考えれば拍子抜けな結果だったが、誰もが納得する妥当な行き先ではなかった。

カルテットとして鳴り続ける奇跡

ストラディヴァリウスが何故そんなに価値があるのか。論じ始めれば本が何冊も書け、挙げ句の果てに、結論は出まい。ヴィンテラが音楽文化の中心に鎮座する土地柄、室内楽は脇に追いやられるのは仕方ないにせよ、地元関係者とすればフラストレーションが溜まる状況であった。

今世紀初め頃にパガニーニと同じジェノバ出身の四人の青年が結成したクレモナQは、イタリアQメンバーに師事し、メジャー国際コンクールでファイナリストに何度も名を連ね、今やクレモナの音楽院で弦楽四重奏を教えるイタリア期待の若き実力団体だ。ストラディヴァリの没後に工房を閉鎖させたクレモナ市も、時移り再び「弦楽器の街」としてアイデンティティを確立しようとしている。二百年数十年前の「パガニーニ・セット」の里帰りは、地元で大きな話題となった。

名器の帰郷は期間限定。既に日本財団は新たな貸与先の国際公募を始めている。クレモナQも当然、応募するだろう。一年の特別貸与は、地元梓へのハンディという粋な計らいなのかもしれない。

この秋以降の「パガニーニ・セット」の行方に、目が離せない。名器は生きている。骨董ではない。

音楽にとって、楽器は唯一の必需品だ。だがときに、楽器は道具以上の価値を有してしまう。例えばヴァイオリンである。松や楓の板にニスを塗った五百グラムほどの工芸品だ。三百年以上前に北イタリアのクレモナに工房を持ち、総計六百挺の製器が現存する楽器

ジものの常で、道具として使い勝手が良いわけでもない。十七年間《パガニーニ》を弾いた元東京Q ヴィオラ磯村和英氏も「気品の高いサラブレッドを飼慣らすという感じでした」と洩らしている。そもそも何の実用性もない芸術の世界で、道具に価値を与えられるのは芸術的価値を創り出せる者の評価である。その点、「パガニーニ・セット」は抜きん出ている。前述のスペイン王宮に飾られる四挺は、当時クレモナを支配していたスペイン王に献上すべくストラディヴァリが準備したセット。これに対し「パガニーニ・セット」は、超絶技巧で十九世紀前半に一世を風靡したヴァイオリン奏者ニコロ・パガニーニが購入、生涯手元に置き、愛用した四挺なのだ(パガニーニはヴァイオラも操り、チェロは弾かぬも弦楽四重奏を率いた)。史上最高の弦楽器工房のストックから、史上最高の弾き手が厳選したセットである。どんな鑑定家の評価より意味があると見なされて当然だろう。

パガニーニ没後、四挺の楽器は散逸した。それから百年余り、数

職人アントニオ・ストラディヴァリの真作、所謂「ストラディヴァリウス」であれば、数千万から数億円の値が付くのも珍しくない。

二〇一三年初夏、ニューヨークを拠点に国際的に活動していた東京クワルテット(以下東京Q)が十四年間の活動を終えた。世界中多の楽器ディーラーが「パガニーニ・セット」をまとめるべく奮闘し、骨董としての楽器の魅力に取り憑かれた収集家の所有欲と格闘した。一九四九年、ニューヨークの楽器商エミール・ヘルマンが、とうとう全楽器商の見果てぬ夢を叶える。主に第一ヴァイオリンのパートを担当する《サラブリーエ》は、パガニーニが購入した額の百倍相当の四万ドルだったという。ヘルマンはこのセットを十五万五千ドルでNYの音楽好き富豪クラーク夫人に売却。夫人は名手を集め弦楽四重奏団を結成させ、パガニーニQと称した。以降、所有者と演奏者の変遷はあれど、奇跡的に「パガニーニ・セット」はカルテットとして鳴り続けている。

クレモナへの里帰り

東京Qを離れた後も安住の地を見出せなかったかと思えた「パガニーニ・セット」だが、ハーゲンQとの音楽作りはわずかに四シーズンで終わる。国境通過に膨大な関連書類と審査時間が必要で、三カ月一度の指定楽器商でのクリーニン

グ、半年に一度の状態チェックを義務づけられた骨董品を日常的に持ち歩くのだ。二〇一六年夏に第二ヴァイオリンのライナー・シュミットが倒れて以降、活動が制限されたハーゲンQには負担が大きかったのか。貸与先が音楽界の話題になるのも待たず、日本音楽財団から「クレモナQへの一七七年秋から一年間の期限付き貸与」が発表された。室内楽専門家はともかく、多くの楽器関係者が慌ててクレモナQの経歴を調べた。なにしろ、パガニーニ自身の弦楽四重奏団に始まり、パガニーニQ、クリーヴランドQ、東京Q、ハーゲンQと続いた「パガニーニ・セット」保有者リストには、いささか釣り合わない名前があったことは否めなかったからである。F1世界選手権で、名門フェラーリのシートにイタリア人無名若手が指名されたようなものだ。そもそも西洋音楽の故郷イタリアからは、ナチスがユダヤ系音楽家を一掃し人材不足に陥った第二次大戦後に、音楽不在の渴きを癒やすように出現した伝説のイタリアQ以降、真の意味での国際的な弦楽四重奏団は出ていない。オペ